

一般社団法人 日本土壤肥料学会 2022 年度通常総会

議 事

第 1 号議案 2021 年度事業報告、事業報告の附属明細書、 収支決算報告および監査報告

I. 2021 年度事業報告（令和 3 年 3 月 1 日～令和 4 年 2 月 28 日）

2021 年度は、2020 年度に続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が事業の遂行に大きく影響し、通常総会、理事会、各種委員会、年次大会、若手の会、支部大会、主催講演会は、当初計画通りの開催が困難となった。また、海外での感染拡大の影響も大きく、若手海外渡航支援や、国際会議等への代表者派遣も中止せざるを得ない状況が続いた。

こうした状況に伴い、総会は全代議員によるみなし決議、「土と肥料」の講演会および年次大会（北海道大会）はオンライン開催となり、支部大会や土壤教育活動は感染対策を行った現地開催またはオンライン開催となった。また、理事会、各種委員会はメール会議やオンライン開催となったが、9 月末に緊急事態宣言全面解除となり、学会賞等選考委員会は対面開催、10 月理事会、会誌編集委員会、および原発事故から 10 年の取組みと今後の展望を論議する学会主催シンポジウムは対面とオンラインのハイブリッド開催となった。しかしながら、その後の感染拡大を受けて対面での開催が困難な状況となった。定期刊行物では、会誌は計画通り刊行され、欧文誌の刊行は遅れが生じたものの、そのインパクトファクター（IF）は大きく上昇した。一方、若手支援の拡充を図るため、北海道大会ではポスター発表および口頭発表の若手優秀賞の表彰、国際研究集会へのオンライン参加費支援が新たに取組まれた。また、総会みなし決議に基づく会費の減免、休会制度の実施が可能になり、2022 年度の学生会費の免除を決めた。そのほか、会誌進歩総説の電子書籍販売、原発事故から 10 年の節目の学会主催シンポジウムの開催、学会創設 100 周年事業の準備など、新たな取組も行われた。

これらコロナ禍のなかで学び利用したオンラインツールや新たな対応方策は、コロナ収束後の学会活動にも活かしていくべきと考えられた。

1. 定期刊行物および資料の刊行

1) 定期刊行物

- (1) 日本土壤肥料学雑誌（会誌）は、第 92 巻第 2 号～第 6 号および第 93 巻第 1 号の計 6 冊を刊行した。掲載した論文数は次の通りである。報文 15 編、ノート 8 編、技術レポート 3 編、講座 4 編、総説 14 編、資料・国内外情報等 26 編、ニュース（地域の動きを含む）、書評、欧文誌掲載論文要旨、合計 517 頁、ほかに会員消息、編集委員会だより、学会だより（土壤教育活動だよりを含む）等。
- (2) SOIL SCIENCE AND PLANT NUTRITION（欧文誌）は、COVID-19 の影響などにより発刊時期が遅延し、2021 年度におけるオンライン上での刊行は Vol.67, No.2～No.6 の計 5 冊となり、掲載した論文数は、通常論文 59 編、レビュー 3 編、会誌掲載論文要旨、合計 619 頁であった。年度内の刊行予定であった Vol.68, No.1 は、2022 年 3 月の刊行となった。
- (3) 日本土壤肥料学会講演要旨集（第 67 集、231 頁）を 2021 年度北海道大会（9/14～16）に際し、電子媒体として刊行した。

2) その他の刊行物

会誌第 92 巻第 2 号に掲載の進歩総説「植物のミネラル輸送研究最前線」を非会員へも提

供できるように、電子書籍として刊行した。

北海道大会に際し、北海道支部の編集による「北海道農業と土壌肥料 2021—持続可能な北海道農業を支える土壌肥料研究—」が（公財）北農会から刊行された。

2. 講演会および研究会等の開催、支援

1) 「土と肥料」の講演会

COVID-19 拡大の影響により、2021 年 5 月 22 日オンライン講演会として開催した。テーマは「東日本大震災 10 年：被災農地の復興における土壌肥料学の貢献」、講演者と演題は、西田瑞彦氏（東北大学大学院農学研究科）による「東日本大震災津波被災水田の復旧と復興」および信濃卓郎氏（北海道大学大学院農学研究院）による「東京電力・福島第一原発事故による放射性物質の農地汚染とその対策」である。本講演会は日本学術会議の後援を受けて実施し、約 140 名の参加者があった。

2) 学会主催シンポジウム「原発事故から 10 年～これまで・今・これからの農業現場を考える～」

福島第一原子力発電所の事故から 10 年の節目に、土壌肥料学分野がその基盤的な知識と経験に基づいて農業現場に発生した問題に対して多くの解決策を示したことを総括するとともに、今後の学術的な貢献の道筋や課題についても展望するシンポジウムを開催した（11/5、福島市）。事前の登録者数は 420 名を越え、当日の参加者は現地会場に約 100 名、Youtube ライブ配信には少なくとも 260 名（最大接続数）と盛況であった。開催後のアンケートでは、シンポジウムの内容を好意的に捉えたものが多く、とりわけ現地対面開催の意義を評価したものや、講演内容を一般の方々にもひろく発信すべきとのコメントが多かった。当日の各演題の内容は、会誌である日本土壌肥料学雑誌第 93 巻第 1 号に掲載した。なお、本シンポジウムは、日本学術会議土壌科学分科会の共同主催、同 IUSS 分科会の共催、福島県、福島大学および農研機構の後援により実施した。

3) 2021 年度年次大会

- (1) COVID-19 の影響により北海道大会は札幌市での開催を断念し、全面オンライン開催に切り替えて 2021 年 9 月 14 日（火）～16 日（木）に開催した。一般講演は LINC Biz システムを使用したポスター発表と Zoom ウェビナーによる口頭発表とし、発表演題数は 422（口頭発表 223、ポスター発表 199）であった。大会への参加者数は 743 名（正会員 515、学生会員 169、非会員 59）であった。
- (2) シンポジウムは、公開シンポジウムを含めて 3 つのテーマのシンポジウムを実施した(9/16)。
 - 1,4,8 部門：持続可能な窒素利用に向けた土壌肥料学の挑戦
 - 9 部門：土壌教育の国際ガイドラインの理念と内容はこれだ！～持続可能な社会の創り手の育成に向けて～
 - 4,6,8 部門：土から生まれる美味しさと安心とは（公開シンポジウム）また、ミニシンポジウム「今、カリ供給力の再評価が必要な理由とは？」が行われた。
- (3) 高校生による研究発表会は LINC Biz を利用して行った（9/14）。18 課題（10 校）の発表があり、最優秀賞 1 件、優秀賞 3 件を表彰した。
- (4) 学会賞等授賞式は Zoom ウェビナーを利用して行った（9/15）。

第 66 回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・林 健太郎：土壌を要とした窒素の環境動態および人間圏フローの研究
- ・樋口恭子：オオムギを中心とした植物の包括的アルカリ耐性機構の研究
- ・和崎 淳：低リン耐性植物の根分泌物による難利用性リン可給化機構に関する研究

第 26 回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・宮丸直子：サトウキビの安定多収に向けた土壌改良技術の開発と普及啓発

第 39 回日本土壤肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・原 新太郎：土壤植物系における窒素・リンの動態に関わる微生物の研究

第 10 回日本土壤肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

- ・大家理哉：水田における家畜ふん堆肥施用時期を考慮した施肥設計技術の確立
- ・塩野宏之：積雪寒冷地水田からの温室効果ガス削減と水稻生育改善技術の開発
- ・山根 剛：家畜ふん堆肥ペレット施用後の一酸化二窒素発生制御に関する研究開発

日本土壤肥料学会雑誌論文賞の受賞者と受賞論文題目

- ・井上 弦、中尾 淳、矢内純太、佐瀬 隆、小西茂毅：京都府宇治市の茶園土壌を用いた覆下栽培の発祥時期の推定
- ・郷内 武、藤田 裕、佐野智人、大浦典子、須藤重人、朝田 景、江口定夫：黒ボク土ナシ園における豚糞堆肥を活用した代替施肥による大気圏および水圏への窒素負荷軽減効果

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

- ・Kazunobu Toriyama, Taku Amino, Kazuhiko Kobayashi : Contribution of fallow weed incorporation to nitrogen supplying capacity of paddy soil under organic farming
- (5) 日本土壤肥料学会賞、同技術賞、同奨励賞、同技術奨励賞、日本農学賞・読売農学賞の受賞者による記念講演は Zoom ウェビナーを利用して行った。
- 日本土壤肥料学会賞、同技術賞、同奨励賞、同技術奨励賞の受賞者と受賞業績
- ・(4) に記載の通り。

2021 (令和 3) 年度日本農学賞・読売農学賞受賞者と受賞業績

- ・牧野 周：イネの生産性向上をめざす光合成機能の改善に関する研究
- (6) 特別講演を学会賞等受賞記念講演に引き続き行った。このうち、IUSS 会長の講演は現地メキシコでの停電のために後日の動画配信となった。
- ・小崎 隆 (愛知大学、IUSS 前会長) : ご挨拶—IUSS 会長の任期を終えて
 - ・Laura Bertha Reyes Sánchez (メキシコ国立自治大学、IUSS 会長) : The greatest challenges to face in the immediate future in soil science
- (7) 日本土壤肥料学会雑誌論文賞および SSPN Award 受賞論文については、受賞記念ポスターを 9 月 14 日に LINC Biz を利用して発表した。
- (8) 日程の最後に Zoom ウェビナーを利用した閉会式を開催し、会長および 2021 年度北海道大会運営委員長の挨拶を行った。
- (9) 土壤肥料学会若手の会が第 1 部「自己紹介・研究発表 PR 大会」(9/13) および第 2 部シンポジウム「研究者・技術者としての働き方」(9/17) としてオンライン開催された。
- (10) 年次大会がオンライン開催となったため、従来行ってきた懇親会は中止となった。

4) 支部大会

- ・北海道支部：2021 年度秋季支部大会およびシンポジウムをオンライン開催 (11/24) した。特別講演「コロナ禍における土壤科学の課題」1 講演、シンポジウム「北海道農業と土壤肥料：この 10 年と将来展望」5 講演、ポスター発表 18 題 (優秀発表賞 2 題) が行われ、参加者は 77 名であった。
- ・東北支部：2021 年度支部大会をオンライン開催した (12/1)。特別講演「イネの生産性向上をめざす光合成機能の改善に関する研究」1 講演、ポスター発表 15 題が行われ、参加者は 33 名であった。支部大会後に公開シンポジウム「多収米研究の現状と将来」4 講演を行い、参加者は 104 名であった。
- ・関東支部：2021 年度支部大会をオンライン開催 (11/18~25) した。特別講演「土づくり・減肥に役立つ緑肥の効果の解明とその利用」1 講演、ポスター発表 15 題 (ポスター

賞3題)が行われ、参加者は42名であった。

- ・中部支部：2021年度支部研究会・中部土壌肥料協議会を開催(12/2～3、岐阜市)した。特別講演「持続可能な食糧生産における土壌肥料の新展開」3講演、ポスター発表10題、口頭発表8題が行われ、参加者は会員43名、非会員11名の合計54名であった。
- ・関西支部：2021年度講演会・関西土壌肥料協議会シンポジウムをオンライン開催(11/26～12/3)した。口頭発表17題(若手優秀発表賞2題)、ポスター発表14題が行われ、参加者は58名であった。
- ・九州支部：2021年度支部例会をオンライン開催(12/7～8)した。口頭発表26題が行われ、参加者は約147名であった。また、支部学術賞1件を選出した。

3. 研究の奨励および研究業績の表彰

2021年10月15日に選考委員会を開催し、2022年度日本農学賞の推薦候補者、第67回日本土壌肥料学会賞、第27回同技術賞、第40回同奨励賞、第11回同技術奨励賞、第11回同貢献賞、日本土壌肥料学雑誌論文賞およびSSPN Awardの受賞者を審査し選定した。

第67回日本土壌肥料学会賞受賞者と受賞業績

- ・江沢辰広：アーバスキュラー菌根共生における物質輸送の分子基盤と環境応答
- ・舟川晋也：比較土壌生態学による土壌資源の持続的利用に関する研究
- ・牧野知之：土壌中における有害元素の動態と作物吸収低減に関する研究

第27回日本土壌肥料学会技術賞受賞者と受賞業績

- ・鈴井伸郎：植物RIイメージング技術の開拓と植物栄養学研究への展開

第40回日本土壌肥料学会奨励賞受賞者と受賞業績

- ・伊藤英臣：農耕地の窒素循環と農業害虫に関わる土壌微生物の研究
- ・内田義崇：農耕地土壌における窒素動態の解析とN₂O発生削減技術の開発に向けた分野融合的研究
- ・木下林太郎：土壌の地理的空間変動解析による肥沃度改善への貢献
- ・丸山隼人：植物の土壌中難利用性リン獲得機構に関する研究
- ・山崎清志：圃場観察に基づいた根の栄養屈性の発見

第11回日本土壌肥料学会技術奨励賞受賞者と受賞業績

- ・櫻井道彦：有機栽培畑における実践的な土づくりと養分供給技術の開発

第11回日本土壌肥料学会貢献賞受賞者と受賞業績

- ・瀧 勝俊：中部支部における土壌教育活動の実施体制の整備と長年にわたる運営および実践

日本土壌肥料学雑誌論文賞受賞者と受賞論文題目

- ・高橋智紀、西田瑞彦、浪川茉莉：原位置において簡易に測定できるガス拡散係数測定装置
- ・人見良実、吉泉裕基、亀和田國彦：埋設型ライシメータ利用による黒ボク土畑での牛糞堆肥連用が窒素動態に及ぼす影響評価

SSPN Award 受賞者と受賞論文題目

- ・Fan Wang, Reiko N. Itai, Tomoko Nozoye, Takanori Kobayashi, Naoko K. Nishizawa, Hiromi Nakanishi : The bHLH protein OsIRO3 is critical for plant survival and iron (Fe) homeostasis in rice (*Oryza sativa* L.) under Fe-deficient conditions

4. 内外の研究者、技術者、他学会等との連絡および協力

1) 日本農学会関係

- ・2021年度日本農学会シンポジウム「コロナ禍のその先へ～農学のチャレンジ～」の開催

に協力し、本学会より波多野隆介前会長が「コロナ禍で見たホリスティックで学際的な土壌科学」を講演した（10/2）。

- ・2022年度日本農学会シンポジウムのテーマおよび話題提供の募集に対応した。
- ・日本農学会からの依頼に基づき、次期役員候補を推薦した。

2) 日本学術会議関係

- ・学会主催シンポジウム「原発事故から10年～これまで・今・これからの農業現場を考える～」は日本学術会議と共同主催した（11/5）。
- ・土壌科学分科会およびIUSS分科会の特任連携会員に各々本学会の信濃卓郎氏および矢内純太氏が承認された（5/30）。
- ・IUSS次期役員候補13名をIUSS分科会へ推薦した（4/7）。
- ・日本学術会議が主催する講演会、研究会の開催案内等を学会HP、FBに掲載して会員へ情報提供した。
- ・IUSS分科会の依頼に基づき、IUSS次期役員選挙に対応した。

3) 他学会等関係

- ・第33回環境工学連合講演会「SDGsに向けた環境工学の役割」（5/25、オンライン開催）を共催し、本学会の江口定夫会員が「食料生産～消費システムの窒素フローと窒素フットプリント」を講演した。
- ・第31回環境工学総合シンポジウム（7/8～9）を協賛した。
- ・第58回アイソトープ・放射線研究発表会（7/7～9オンライン開催）を協賛した。
- ・共催予定の2020年酸性雨国際会議（Acid Rain 2020、新潟）は再々延期（2023.4/18～21）となった。
- ・日本粘土学会第64回粘土科学討論会（9/14～18オンライン開催）を共催した。
- ・農研機構国際シンポジウム「Remediation of Radioactive Contamination in Agriculture: Next Steps and Way Forward（放射性物質汚染からの農業復興）」（10/4オンライン開催）を後援した。
- ・日本腐植物質学会第37回講演会（11/26～27、オンライン開催）を協賛した。

4) IUSS、ESAFS等関係

- ・ESAFSサポートオフィスを通じ、第15回ESAFS（クアラルンプール）が2022年8月22日～26日に延期となったことなど関連情報を発信した。
- ・小崎IUSS前会長の出張支援を予定していた塩性土壌の修復に関する国際会議（中国・長春）は、COVID-19のためオンライン開催（7/30～8/1）となった。
- ・Laura Bertha Reyes Sánchez IUSS会長の北海道大会への招聘（9/14～16）は、COVID-19のため取りやめとなり、オンライン開催となった大会において特別講演を行った（9/15）。
- ・小崎IUSS前会長の出席支援を予定していた2020年度IUSS Distinguished Service Medal受賞者（オーストリア元環境相Dr. Fischler）の授賞式・シンポジウム（10/15）はオンライン開催となった。
- ・担当者派遣予定（10/14～22）であった第6回土壌分類に関する国際会議（ICSC：メキシコ・ケレタロ）の開催は延期（2022.3/25～4/1）となった。

5) 定期刊行物の寄贈・交換

内外の研究機関に対して定期刊行物を寄贈・交換した。

- ・日本土壌肥料学雑誌 国内10、国外9
- ・Soil Science and Plant Nutrition 国内5、国外16

5. 本学会の委員会等活動

1) 企画委員会

- ・2022年度総会後に開催する「土と肥料」の講演会を企画した。

2) 財政基盤整備委員会

- ・本学会における収益事業と法人税について、現状の課題と対応方策を検討した。

3) 土壌教育委員会

- ・土壌教育委員会をオンラインで開催し(5/15)、昨年度の事業報告および2021年度の事業と予算の確認、北海道大会における「高校生による研究発表会」の準備状況の確認、新学習指導要領の文言の精査と要望内容および土壌教育の国際ガイドラインに関する検討等を行った。
- ・北海道大会において「高校生による研究発表会」を大会1日目(9/14)の16:30~18:00にLINC Bizを利用したポスター発表形式でオンライン開催し、10校18課題の発表が行われた。大会参加者とチャットによる熱心な質疑応答が行われ、最優秀ポスター賞1課題、優秀ポスター賞3課題を選出し表彰した。表彰結果と会長、大会運営委員長、土壌教育委員長の講評を学会HPに掲載した。
- ・文科省第2期ESD(持続可能な開発のための教育)国内実施計画案に係るパブリックコメントに、「協働するステークホルダーに学術団体を加える」意見を学会長名で提案し、採用された(5/31)。
- ・委員による教育活動(観察会(4/6、狭山市)、「光る泥だんごづくり」(4/17、寄居町)、出前授業「土のふしぎを探る」(5/6、狭山市)、土壌モノリスの展示(5/2~6/20、6/3~6/30、7/25~8/30、11/14~1/4、寄居町)、「土の教室-土のふしぎを解き明かそう!」(7/24~7/30、狭山市)、「土の中の生き物を探せ!」(10/16、寄居町)、出前授業「土砂災害の起こるしくみから防災を考える」(10/26、狭山市)、出前授業「地面をつくる土の粒と雨水の行方」(11/1、深谷市)、「森林生態系と土壌動物の観察」(11/7、高松市)、「土のすきまを調べよう」(11/28、狭山市)、「世界土壌デー記念・土でアート作品づくり」(12/5、寄居町)を行い、その概要は「土壌教育活動だより」として会誌に掲載した。

4) 広報対応

- ・会誌の会告およびニュース、学会ホームページ(HP)、フェイスブック(FB)、メーリングリスト(ML)によって、学会の活動概要、各種募集情報、シンポジウム等イベント情報、年次大会・支部会開催情報等を発信した。
- ・学会HPに「土と肥料」の講演会概要等の記事および講演要旨等を掲載した。
- ・「エコプロ2021」に出展した(12/8~10、東京ビッグサイト)。

5) 国際土壌の10年関連活動

- ・IUSS、ESAFSを中心に代表者派遣、委員等の推薦、国際会議等に係る情報収集と発信を継続した。
- ・12月5日の世界土壌デーを契機とした土壌断面動画の作成・共有について、中華土壌肥料学会、マレーシア土壌学会、国際土壌科学会議第4部門4.4部会(Soil Education and Public Awareness)と連携し、ESAFSメンバーに提案した。
- ・国連気候変動会議(COP26)における「気候変動に取り組むために世界を団結させる」に基づくIUSSからの呼びかけを受けて、土壌科学コミュニティとすべての地域の土壌科学者に、土壌と気候変動の相互関係に関するWASWAC-IUSSポジションペーパーへの支持を表明するとともに、会員へ向けて賛同の署名依頼を行った。

6) 男女共同参画学協会連絡会への対応

- ・連絡会が企画する「加盟学協会の活動推移調査」に回答した。
- ・女子中高生夏の学校2021(8/8~9、オンライン開催)に参加し、ポスター(生命と環境を支える「土壌」とは?)展示を行った。

- ・男女共同参画学協会連絡会の第5回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査（大規模アンケート）に協力し、会員へ参加を呼びかけた。

6. 会務報告

1) 会員の動向

- (1) 2022年2月末日における会員数は次のとおりである。
正会員 1,617名（うち会費免除正会員 67名、外国正会員 16名）、賛助会員 37社、名誉会員 11名、学生会員 298名（うち留学生 73名）、国内団体購読会員 85団体
合計 2,048名・団体
- (2) 2022年2月末日までの入退会者数（種別変更を含む）は次のとおりである。
入会：正会員 79名（うち会費免除会員 1名、外国正会員 3）、学生会員 123名（うち留学生 27名）、名誉会員 1名
合計 203名・団体
退会：正会員 118名（うち会費免除会員 4名、外国正会員 2名）、学生会員 112名（うち留学生 18名）、名誉会員 1名、国内団体購読会員 8団体
合計 239名・団体

2) 会議

- (1) 総会：2021年5月22日、千代田区立日比谷図書文化館において第44回通常総会を開催する予定であったが、COVID-19の影響により通常開催できない事態となった。そこで、一般社団・財団法人法第58条第1項および本学会定款第18条第3項、第4項の規程に基づいて、総会のみなし決議を行った。その結果、第1号議案（2020年度事業報告、同事業報告の附属明細書、同収支決算報告、同監査報告）および第2号議案（2021年度事業計画、同収支予算案）、第3号議案（定款・細則の変更）、第4号議案（名誉会員の推薦）、第5号議案（役員の新任・退任）について、5月22日までに代議員100名全員から同意が得られ、総会での決議があったものとみなされた。また、みなし決議に関する総会議事録は、2021年度第1回理事会（5/22）で承認され、一連の経過を会誌第92巻第4号に掲載した。
- (2) 理事会：COVID-19の影響により、理事会は7回（3/20、5/22、6/12、8/7、10/16、12/18、2022.1/22）のうち6回がオンライン開催され、所要の事項・会務を報告・審議し、その議事録を会誌のニュース欄に掲載した。主要な議題としては、新役員体制における役職・会議日程、COVID-19の影響下での年次大会の開催方法と学会賞等授賞式並びに記念講演等の計画、会誌および欧文誌の企画・投稿・編集・刊行の状況と課題への対応、欧文誌の出版契約更新への対応、広報・土壌教育委員会・部門長会議の諸活動、他学協会・機関とのイベントの共催・後援・協賛、若手育成・支援、外部顕彰への推薦対応、会員の入退会等の承認、学会決算および次年度予算に関する事項、進歩総説「植物のミネラル輸送研究最前線」のオンライン出版、原発事故10年シンポジウムの開催案、学会創立100周年事業の準備、若手会員への支援拡充等について審議し、実施してきた。
- (3) 部門長会議：部門長会議は、第1回（3/10～16）、第2回（6/8～11）をメール会議で行い、北海道大会におけるシンポジウムの公募に対する3件の企画案について検討し、いずれも採択した。オンライン開催となった北海道大会一般講演のプログラム編成、若手ポスター発表優秀賞と若手口頭発表優秀賞の選考方法、部門長・副部門長の交代等について検討した。また、大会後にオンライン打合せ（9/22）を開催し、北海道大会において実施した若手を対象とする優秀発表表彰の今後の取り扱い等について検討した。
- (4) 2021年度学会賞等選考委員会：学会事務所において会長を議長として開催し、2022（令和4）年度日本農学賞の推薦候補者、第67回日本土壌肥料学会賞、第27回同技術賞、第40回同奨励賞、第11回同技術奨励賞、第11回同貢献賞の受賞者を選考した（10/15）。その結

果は第4回理事会(10/16)での承認を経て、会誌92巻第6号に掲載した。また、同日午前、学会事務所において、論文賞等選考委員会を開催し、日本土壤肥料学雑誌論文賞受賞論文とSSPN Award 受賞論文を選考した。その結果も第4回理事会での承認を経て、会誌92巻第6号に掲載した。

- (5) 会誌編集関係：7回の常任編集委員会(4/24 オンライン会議、6/14~18 メール会議、8/14 オンライン会議、12/4 ハイブリッド会議、12/9~14、12/24~2022.1/6、2022.1/24~1/31 メール会議)および2回の拡大編集委員会(9/17~10/20、11/1~11/10 メール会議)を開催し、論文投稿・審査状況および審査システムの確認、投稿規程・執筆規程の改定の協議などを行った。論文の審査、会誌の編集・発刊は順調であるが、投稿論文数が減少している。2021年度は、第92巻第2号に進歩総説「植物のミネラル輸送研究最前線」を掲載し、第92巻第2号~第93巻第1号までを刊行してJ-STAGEに掲載した。
- (6) 欧文誌編集関係：2回の編集委員会(5/22、9/14、オンライン会議)を開催し、SSPNの投稿・編集・出版状況、プレプリント論文の扱い、部門長の編集委員兼任ルールの緩和、編集委員の交代、学会賞向けMini ReviewをInvited Reviewへの名称変更、特集セクションの状況、刊行の遅れ、Editorial Office体制の課題などが検討された。SSPNのIFが1.432(2019)から2.389(2020)に上昇した。また、T&F社とのSSPN出版契約を更新した。2021年度は、SSPNのVol.67, No.2~No.6までを刊行した。
- (7) 支部における会議
- 北海道支部：第1回支部評議員会(6/11~17)、第2回支部評議員会(11/5~12)をメール会議、支部総会(11/24)はオンライン開催し、2021年度事業報告、2022年度事業計画、北海道土壤肥料協議会からの寄付金受入、2020年度会計・監査報告、2021年度会計中間報告、2022年度予算、2022年度の支部役員・評議員を承認した。支部総会の参加者は55名であった。
- 東北支部：支部役員会(2022.1/31)、支部総会(2022.2/9)をメール会議により実施し、2020年度事業報告および会計報告、2021年度事業計画、2022年度事業計画および予算、2022年度支部役員を承認した。
- 関東支部：支部幹事会(11/20)および支部総会(11/20)をオンライン開催し、2020年度事業報告、同決算および監査報告、2021年度事業計画および予算、2022年度支部長・監事、2022年度事業計画および予算を承認した。
- 中部支部：168回支部評議員会(6/12)をオンライン開催した。169回支部評議員会(12/2)および82回支部総会(12/2)を十六プラザ(岐阜市)にて開催し、2020年度決算、2021年度事業報告と仮決算報告、2022年度の事業計画案と予算案を承認した。総会は中部土壤肥料協議会101回例会と合同開催し、参加者は会員43名、非会員11名であった。
- 関西支部：支部役員会(2022.1/28~2/3)をメール会議により開催し、2020年度事業総括報告・同決算報告、2021年度役員の変更報告、2021年度事業報告・同収支予算報告ならびに会計監査報告、2022年度支部長の選出、2022年度事業計画案ならびに収支予算案を承認した。
- 九州支部：支部常議員会(12/7)、支部総会(12/8)をオンライン開催し、2020年度事業報告・同決算報告、2021年度事業計画案、同予算案、2022年度事業計画案、同予算案を承認した。また、支部賞選考委員会(12/7)をオンライン開催し学術賞1件を選考した。
- (8) 支部長連絡会：支部・本部間、支部間の連携を深めるために支部長連絡会をオンラインで開催した(10/26)。各支部の活動報告と計画、支部における会計処理に関する留意事項、学会創立100周年への取組み、若手の育成方策などについて情報共有および意見交換を行った。

3) その他

- ・若手会員の海外学会等の発表渡航費支援については、COVID-19の影響でオンライン開催の

国際会議等が増えていることに鑑み、その参加登録費を支援対象に追加した。

- 2023 年度年次大会は、上野秀人氏（愛媛大学）を大会運営委員長とし、松山市において開催することを承認した。
- 外部顕彰へ本学会から推薦を行った。小崎隆会員の 2022（令和 4）年度日本農学賞・読売農学賞受賞が決まった（2022.2/15）。
- 学会創立 100 周年へ向けて準備委員会を設置し、具体的な事業計画の検討を開始した。

Ⅱ. 2021（令和3）年度事業報告の附属明細書

事業報告の附属明細書として記載すべき事項はない。